

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02324

研究課題名（和文）一九八〇年代中国の思想と文化に関する研究

研究課題名（英文）Study on Chinese Thought and Culture in the 1980s

研究代表者

鈴木 将久（SUZUKI, Masahisa）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：00298043

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、一九八〇年代の中国文化がいかにして生成されたかを、青年の思想形成のプロセスに焦点をあてて検討した。青年たちが、文化大革命後の混乱から新しい文化を生み出すために、思想的な文章から詩歌まで様々なタイプの文を書き、同時に自ら雑誌を編集・発行しながら、模索を続けた過程を明らかにすることができた。彼らが生み出した文化は、現在まで中国社会を規定しているものであり、本研究には現在の中国社会の生成のプロセスを検討する意味があった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一九八〇年代の中国文化がいかにして形成されたかは、現在の中国社会を見るためにも重要な研究課題である。しかし従来の研究では、基礎的な資料すら整理されていなく、また生成のプロセスを動的にとらえることはできていなかった。本研究は、雑誌の収集、関係者のインタビュー、研究会の開催、および研究ネットワークの構築によって、一九八〇年代の中国文化が生み出された現場に接近することができた。中国との関係を考える際に、中国社会の動向を内在的に知ることは極めて重要であり、本研究はそのための基盤を提供するものであった。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined how the Chinese culture of the 1980s was created, focusing on the process of youth thought formation. In order to create a new culture from the confusion after the Cultural Revolution, the young people wrote various types of letters, from philosophical essays to literary poems, at the same time editing and publishing the magazine himself, and through such activities they continued to pursue. The culture they created has stipulated the Chinese society up to the present, and this research also examined the process of generation of current Chinese society.

研究分野：中国文学

キーワード：中国文学 中国文化 一九八〇年代文化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の意義

本研究が目指したのは、一九八〇年代の中国文化がいかんして生み出されたかを、青年の思想形成のプロセスに焦点をあてて検討することであった。一九八〇年代の中国は、文化大革命の混乱から抜けだし「改革開放」の新しい時代に向かう道筋を模索した転換期であった。この時代に発生した転換は、現在まで中国社会を根底において規定している。したがって一九八〇年代中国を歴史的に検討することは、現代中国社会を見る視点の問い直しにもつながった。

(2) 当時の研究状況

本研究開始当初、中国をはじめ各地で一九八〇年代の中国についての論述が生まれていた。しかし多くは、ノスタルジックに回顧する文章か、あるいは大きな政治的事件や著名な思想家の言説だけを紹介するものであり、中国社会の変動のダイナミズムをとらえることはできていなかった。

(3) 青年文化の重要性

当時の文化形成を担った中心的グループは、大学生をはじめとする青年たちであった。彼らの多くは文化大革命中に「下放」経験を持っていて、その経験をもとにしつつ、先頭に立って新しい時代への変化を導いた。しかし青年たちの多くは、当時は著名でなく、またその表現も成熟していなかった。そのため本研究開始当初は、ほとんど関心を寄せられていなかった。彼らが何をしたのか、何を求めたのかについて、そもそも基礎的な資料さえ整理されていない状況であり、正面からの論考はほとんど見られなかった。

2. 研究の目的

(1) 一九八〇年代中国文化の成り立ちを内在的に理解すること

一九八〇年代の中国文化の変容のダイナミズムを明らかにするためには、日本における従来の中国研究の枠組みを問い直す必要があった。近年、中国社会を論じる際に、政治・経済の側面から見る研究が増えている。そうした視点はもとより重要であるが、政治・経済に偏った理解は往々にして中国に対する外在的理解になる。それに対して本研究は中国社会の変動がいかんして生じたかのダイナミズムを明らかにするため、中国社会を内在的にとらえようと試みた。他方で日本における研究の利点をいかすことも心がけた。すなわち、中国国内の研究でしばしば見られる、現在の価値判断にしばられた視点は避けることを意識した。かくして、中国の現状に対して一定の距離を保ちつつ、内在的な理解を試みることによって、中国社会の深層を動的にとらえることが可能になると思われた。

(2) キャンパスにおける文化生成の現場をとらえること

一九八〇年代中国に関する従来の研究は、大きな政治的事件や著名な思想家の言説に集中していた。しかし当時の中国文化は根底的な地殻変動を起こしており、その動態を把握するためには、変動の結果だけを見るのではなく、変化の現場に立つことが必要だと思われた。それゆえ本研究では、文化生成の現場に接近することを目指した。それは具体的には大学における様々な活動であった。大学生は結社やサロンを作って議論をしたり、講演会や文化活動をしたりしながら交流を深めた。中でも重要な活動は、雑誌の発行であった。当時の大学生は、文学雑誌、思想的雑誌から学術性の強い雑誌まで、様々な媒体を自ら編集し、発行した。その活動は、断片的な回想を除いて、現在ではほとんど忘れ去られている。本研究は、大学生が発行した雑誌を可能な限り集め、彼らの活動の実態とその全体像を明らかにすることによって、大学の現場で生み出されていた熱気をとらえることを目指した。

(3) 領域横断的な視野を持つこと

当時の言説は、現在の視点から見ると、思想もしくは文学作品にとらえられるものであった。しかし当時の文脈において、思想と文学は分離していなかった。また文学作品の中でも、詩と散文が同じ作家によって書かれることもあり、ジャンルの区別は意味を持っていなかった。そこで本研究では、ジャンルの区分を超えて、彼らの活動を領域横断的にとらえることを目指した。それは一九八〇年代中国の転換の具体的な様相をとらえるために必要であると考えられた。本研究のメンバーは皆、思想と文学が相互交差する場に注目して研究をしてきており、この研究にふさわしいと思われた。

3. 研究の方法

研究の方法は主として二つの面に分けられた。

(1) 資料の収集

当時大学生が自ら編集し発行した雑誌を可能な限り収集した。当時の雑誌には多様な性質のものがあつた。本研究で第一に注目したのは学術性の強い雑誌であった。当時大学院の入試を再開した大学の多くでは、大学院生による論文を発表する学術雑誌が発行された。これらの雑誌は、学術的論文の形によって、当時の大学生の関心を現していた。本研究では、いくつかの大学の学術雑誌について、本誌および目録を収集した。

第二に、同人誌を収集した。当時の多くの同人誌は文学雑誌であった。大学生たちは文学創作の形で自分たちの思考や表現をしたと考えられた。文学創作として成熟したものとは言えず、現在の文学史からはあまり評価されないが、当時の雰囲気をとらえるためには重要な資料であると考えられた。

第三に当時青年たちに愛読された全国的雑誌を収集した。従来はこうした雑誌に掲載された著名な論者の文章のみが注目されていたが、実際には大学生たちの投稿も多く、無名の青年たちの活動と連続性があることが確認できた。そこで本研究では、影響力のあったいくつかの雑誌を収集した。

(2) 当時の関係者を招聘しての公開研究会

一九八〇年代を大学生として過ごし、現在でも研究活動を続けている関係者を招き、公開の研究会を開催した。研究会の目的は三つあった。第一に、当時の青年たちの雰囲気について、ディテールを語ってもらうこと。すでに断片的な回想はあったものの、ディテールについての記述は不足しており、関係者の聞き取りは重要であった。第二に、現在の視点から一九八〇年代を再考する視点を見出すこと。本研究で招聘したのは人文学の研究者であり、自らの経験を相対化して論じる能力を持った知識人であった。彼らと本研究メンバーの議論によって、一九八〇年代中国文化を現在の視点から読み直す視点を見出すことが可能になると思われた。第三に研究のネットワークを形成すること。それぞれ個々に一九八〇年代中国文化に関心を持っている研究者のネットワークを築き、また日本で研究している若手も参加させることで、国境を越えた研究のネットワークを生み出した。

4. 研究成果

研究成果も二つの面に分けることができる。

(1) 資料を整理したこと

一九八〇年代中国の青年文化については、基礎的な資料が分散している状況にあり、資料を整理し、今後の研究の基盤を築いたことは、重要な研究成果である。整理できた重要な資料に以下のものがある。

学術雑誌。吉林大学『研究生時代』の複印、中山大学『中山大学研究生学刊』、武漢大学『武漢大学研究生学刊』、北京大学『北京大学研究生学刊』の目録を収集した。これらの雑誌の中には現在でも継続しているものもある。中山大学の学刊については、現在の編集部へのインタビューも行った。

同人雑誌。復旦大学で発行された『復旦風』、『詩耕地』、中山大学で発行された『紅豆』、『鐘声』、北京師範大学で発行された『初航』をそれぞれ収集した。いずれもすべてを集めることはできず、活動の一端を知るに留まったが、すべてを収蔵している図書館は存在していないことを考慮すると、重要な成果であった。

一般雑誌。当時公式もしくは半公式の形で発行され、大きな反響を呼んだ雑誌を収集した。青年たち自らが編集したものとして、『這一代』、『青年論壇』がある。また青年たちに大きな影響力を持ったものとして、『文化: 中国与世界』、『走向未来』、『新啓蒙』の各雑誌を収集できた。これらは全号を収集した。一九八〇年代中国文化を考えるうえで重要な基礎資料である。

(2) 当時の関係者の講演会の成果

当時の関係者の講演会として、以下の活動を行った。

呉重慶氏(中山大学)、陳少明氏(中山大学)、張志強氏(中国社会科学院)の講演(2017年10月17日)、楊念群氏(中国人民大学)、趙京華氏(北京第二外国语学院)、李冬木氏(仏教大学)、張業松氏(復旦大学)の講演(2018年2月9日)、陳平原氏(北京大学)、夏曉虹(北京大学)の講演(2018年11月4日)、許紀霖氏(華東師範大学)の講演(2019年1月25日)、陳燕谷氏(中国社会科学院)、劉慧英氏(中国現代文学館)の非公開講演(2019年3月17日)、いずれも貴重な話を聞くことができた。これらの講演は録音し、文字として整理している。筆者と調整を行い、出版をすることを計画している。

(3) 研究会の成果

現在の視点から一九八〇年代中国文化を再考するための研究会として、以下の活動を行った。

林少陽氏「李澤厚的思想史論與八十年代: 以其《中國現代思想史論》為中心」、杉谷幸太氏「“歌德”と“缺德”」論争をめぐって 文革の記憶と反右派闘争の記憶(2017年7月28日)、本研究のスタートにあたり、現在までの研究の到達点と、今後に向けた問題点を確認した。

国際シンポジウム「長期的視点と東アジアの歴史的視点における「五・四」」(2019年5月11日・12日、共催)、研究の総括として、一九八〇年代中国文化を考える際に鍵となる問題である「五四」の思想的遺産について、多面的な視点から議論した。シンポジウムは一九八〇年代だけにしぼったものではなかったが、広い視野からとらえることで、本研究に有益な視座を確認することができた。

(4) 研究ネットワークの構築

資料収集のための中国の大学への訪問、関係者の招聘、公開研究会の開催および研究会への日本在住研究者の参加を通じて、一九八〇年代中国文化に関心を持つ研究者のネットワークを構築することができた。長春、北京、上海、武漢、広州など、様々な地域の活動をつなげて、全体像をとらえるための基盤を構築できた。現在の関係を基盤にして、今後さらにネットワークを拡大することができたら、本格的な研究センターになりえると期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 鈴木将久	4. 巻 0
2. 論文標題 竹内好の「中国文学」（韓国語）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 運動する東アジアを見る眼（韓国語）	6. 最初と最後の頁 299 - 326
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 林少陽	4. 巻 49
2. 論文標題 章炳麟とその周辺の「文学」概念 - 漢字圏の言文一致運動と清末という二つの文脈	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国21	6. 最初と最後の頁 29 - 52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林少陽	4. 巻 34
2. 論文標題 「五四」新学之修辞学：語言思想之現代ゼン変	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国現代文学	6. 最初と最後の頁 33 - 64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井剛	4. 巻 2019 - 1
2. 論文標題 反思日本現代“中国認識”与歴史的“内在理解”	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 開放時代	6. 最初と最後の頁 138 - 149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 SUZUKI Masahisa	4. 巻 11-3
2. 論文標題 Literary Activities among the "Educated Youth": Background on Bei dao's Waves	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Frontiers of Literary Studies in China	6. 最初と最後の頁 462-487
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Lin Shaoyang	4. 巻 54-1
2. 論文標題 Hong Kong amidst Colonialism, Collaborative, and Critical Nationalism from 1925 to 1930: the Perspective of Lu Xun and Confucius Revering Movement	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 China Report	6. 最初と最後の頁 25-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林少陽	4. 巻 1
2. 論文標題 歴史の詩学を求めて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 小森陽一『構造としての語り 増補版』	6. 最初と最後の頁 457-468
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木将久	4. 巻 22
2. 論文標題 改革開放初期中国的“五・四”想象	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京大学中国語中国文学研究室紀要	6. 最初と最後の頁 87 - 103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) info:doi/10.15083/00079015	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 10件 / うち国際学会 18件）

1. 発表者名 鈴木将久
2. 発表標題 博士生『返郷筆記』表達了甚麼？
3. 学会等名 東亜青年の精神狀況与情感政治（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木将久
2. 発表標題 竹内好思想中的中国文学
3. 学会等名 南京論壇（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Lin Shaoyang
2. 発表標題 'Chinese World Order' Encounters 'East Asian World Oder' -- Postwar Japanese Historians' Arguments on Tribute system
3. 学会等名 Global Cities Conference（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林少陽
2. 発表標題 章炳麟の「文学」概念と漢字圏の言文一致運動
3. 学会等名 国語施策/言文一致運動を東アジアの視点から考える（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石井剛
2. 発表標題 回応閻凱教授「天下觀之於当代中国的民族政治」
3. 学会等名 「甚麼是天下？」工作坊（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石井剛
2. 発表標題 From Philology to Philosophy: Toward a New Narrative of the Intellectual History of the Qing Dynasty
3. 学会等名 the Harvard-Yenching Institute 90th Anniversary Alumni Conference (招待講演) (國際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石井剛
2. 発表標題 「土の近代」と「水の近代」 中国近代化の歩みから考える
3. 学会等名 愛知大学国際問題研究所創立70周年記念国際シンポジウム「グローバルな思考とローカルな思考：個性とのバランスを考える」(招待講演) (國際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石井剛
2. 発表標題 「東京学派」と中国「近代」哲学
3. 学会等名 「東京学派」研究第2回ワークショップ(招待講演) (國際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石井剛
2. 発表標題 サイノフォン・スタディーズと中国哲学
3. 学会等名 世界哲学としての東アジア思想（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石井剛
2. 発表標題 Critiquing Historiography: On the Im/possibility of “Immanent Understanding” of History
3. 学会等名 2019 ‘Winter’ Institute in Australian National University “History, Culture and Contested Memories: Global and Local Perspectives”（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石井剛
2. 発表標題 “華語語系哲学” 以及其通向“世界哲学”的可能性雜議
3. 学会等名 北京大学-東京大学東亞研究聯合項目啓動學術會議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木将久
2. 発表標題 竹内好思想中的“中国文学”
3. 学会等名 2017西江Transcultural China国際學術會議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石井剛
2. 発表標題 Philosophizing the Concept “Wen (文)” : Beginning from Takeda Taijun 's Shiba Sen
3. 学会等名 清華大学-東京大学 戦略的パートナーシップ 文系シンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 林少陽	4. 発行年 2018年
2. 出版社 上海人民出版社	5. 総ページ数 408
3. 書名 鼎革以文：清季革命與章太炎「復古」的新文化運動	

1. 著者名 中島隆博、石井剛	4. 発行年 2019年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 215
3. 書名 ことばを紡ぐための哲学:東大駒場・現代思想講義	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	林 少陽	東京大学・大学院総合文化研究科・教授	削除:2019年10月7日
	(LIN Shaoyang)		
	(20376578)	(12601)	

